

依羅原・依羅池

北 島 葭 江

青角髮依羅原に人も逢はぬかも

石走る淡海県の物がたりせむ(七、一二八七)

柿本朝臣人麿之歌集出と後注した二十三首中の一首であるが、必ずしも人麿の詠に限らねばならぬことはないであらう。依羅の地は元祿の新大和川開鑿によつて撰津国住吉郡大羅(今は庭井町)と河内国丹比郡(今の泉北郡天見村)とに分断せられて居るが、もとは河内国にすべて屬して居つたらしい。

併しこの依羅原は和名抄その他に見える三河国碧海郡依羅の地であらう。といふのは青角髮が碧海面の仮字であるといふ説に贅意を表するわけではなく、青角髮は好し即ちよ、よざとほめる形容から同音のよざみの冠詞として使はれたに違ひないが、淡海は京人のつけた遠つ淡海―遠江、近つ淡海―近江の呼称にかかはらず、何れも淡海の国であつて、その土地のゆかりの人は遠江も単に淡海といつて居つたであらうから、この歌では遠江国に久しく住み馴れた官人が哀別の名残を惜しみつつ三河の依羅原を行く帰旅の心の寂寞に堪へないで、せめて誰かにはばなつかしい遠江の国の思出話もして言伝でもしたい心持を表はしたのであらう。

今撰河内国に跨る依羅の故地はつまりこの歌とは縁のないものと

なるが、しかし

千沼回より雨ぞ零り来る四八津の白水郎綱手綱乾せり濡れあへむかも(六、九九九、天平六年春三月幸于難波宮之時歌六首の
中)

の歌はこの依羅地方の景色を詠んだものではあるまいか。この辺に依羅・我孫子の地名がある。依羅は寄網で我孫子は綱引子の転化したものにちがひない。此の辺昔は一带に湖沼地帯であつた如く、その周囲の南西北は順次に標高二十米乃至十四、五米であるのに、こゝだけは東々北にゆるい傾斜を有つた標高十米以下の窪地となつて居る。崇神紀に、狭山池の水量が不足するので濯漑用として依羅池を作ると見え、今天依羅神社に在る近世初期の地図にも水路が狭山、依羅両池をつないで居る。併し仁徳紀にも推古紀にもこの池を鑿つたことが見え、崇神紀には書紀の虚構らしい箇所によく慣用する漢籍の引用文『皇天下之大本也。民所恃以生也』(漢書文帝紀)があるなど書紀編纂当時の假托ではないかとも思はれる。

とにかく依羅の湖沼の堤を高く築き足して濯漑用にはしたがなほこの辺には湖沼が残り漁村が点在したと想像せられる。

四八津といふ処がどの辺にあつたか不明であるが、雄略天皇紀十四年に身狭村主青等が呉国使及織工、縫女を連れて住吉津に到着した際、その呉客の為に磯蘭津路が通せられて、これを呉坂といつたとある。大和の京に通ずる道とすれば住吉から大凡東の方向に通じたものと見てよからうし、その上にこの歌にあるやうに智努海から風が吹いて雨をもたらしたとすれば、大和で「雲が奈良参りをすれば雨」といはれ、雨風は西南から龜瀬溪谷を菅田山へ吹きつけたらしく、従つてこの依羅方面は雨雲の通路に當つたと見てよい。依羅

湖沼地帯の北岸に四八津路があり、その辺に漁村があつたとすれば、この歌は正しく解釈出来るのではあるまいか。四極山の方は多分三河方面のことであらう。

「もとつひと」考

板橋 倫行

本つ人ほととぎすをや希らしみ今や汝が来る恋ひつつ居れば
(巻十、一九六二)

先の太上天皇の御製の霍公鳥の歌一首

ほととぎすなほも鳴かなむ本つ人かけつつもとな吾を哭し泣く
も(巻廿、四四三七)

万葉集中に「もとつひと」(本人、母等都比等)といふ語は二箇所しか出てゐないが、いづれの場合も「ほととぎす」にからんでゐる。どういふ訳で「もとつひと」と「ほととぎす」が形影相伴ふのか、それはちよつと解きかねる問題である。

ここで在来の解釈がどういふ方向をとつてゐたかをのぞいて見る――

略解は一九六二の「もとつひと」に対して

ほととぎすをさしてもとつ人と言へり。集中遠つ人雁がきななむと詠める遠つ人は、雁を言へるにひとし

と「もとつひと」を「ほととぎす」の代換詞と見做してゐるが、なぜさうなるのかは、遠つ人の例証をもつてしても説明不足である。

宣長が「昔のなじみの杜宇よ」と解してゐるのを千蔭は引用してゐるが、これが略解立言の根拠となつたのであらう。

万葉辞典は「もとつひと」を「いにしへびと」「ふるなじみ」と解き、巻十のは霍公鳥を親しんで呼んだのであると細説を加へてゐる。千蔭と宣長両者の説から筋を引くものといへよう。

ところが四四三七の「もとつひと」に対しては、千蔭は契沖に従つて

もとつ人は既に神ざりましし元明天皇などの御事にやといひ、さきに「ほととぎすをさしてもとつ人と言へり。集中遠つ人雁がきななむと詠める遠つ人は、雁を言へるにひとし」といつたのはきれいに忘れて、遠つ人とともに擬人化された「鳥」であつたはずの「もとつひと」はここに至つて完全な「人」にまで格上げされる結果となつた。

「ほととぎす」と「もとつひと」とは、何か不可分からみ合ひながら、その結合の理由の解釈が十分についてゐない、そこからかういふ解釈上の不統一、場当たり主義が生じたものと思はれる。元來ほととぎすといふ鳥名の由つて生れたところは、その啼声に基くもので、つまり擬声語である。ほととぎすの啼声が「ほととぎす」と聞き做されてゐたことは巻十八の

曉に名乗り鳴くなるほととぎす

いやめづらしく思ほゆるかも(四〇八四)

の同伴家持の歌がこれを証する。この啼声から鳥名の生じたことは高田与清(擁書漫筆)内田清之助(日本の小鳥)などで承認されてゐるが、彌富破摩雄氏も万葉集續攷(郭公・杜鵑攷)において

即ち杜鵑の字は、支那人の擬声音で、「ホトトギス」は我が國